

陶磁器から見た海域アジア

— 一三世紀から一四世紀の事例をもとに

徳 留 大 輔

一 はじめに

唐時代の九世紀頃、東南アジア地域は東西交流が活発になり、中国陶磁における海外への輸出が増え始めるが、一六世紀以降、東南アジア地域を中心にヨーロッパ人との接触、交易、植民地化が進む中でさらに流通量が増加している。その前段階として一五世紀後半頃から本格化する「大航海」時代があり、また一五世紀前半には明の永楽帝の時代に鄭和の遠征など海域アジアにおける交易や人、モノの交流が盛んであったことは先行研究により明らかにされてきた。拙稿では輸出向けの陶磁器が数多く生産された中でも一三世紀から一四世紀に注目し、中国東南沿岸部にお

る沈船資料の積み荷の組成を通じた流通のあり方と、東南アジア地域における消費の動向を通して、各地域に中国陶磁の与えた影響について整理を行うものである。

二 同時代の文献に記載される中国陶磁を介した貿易の相手と陶磁器の種類

一三世紀から一四世紀、中国が国外の国家や地域と行っていた貿易に関して、そのスケールが大きかったことは趙汝适『諸蕃志』や汪大淵の『島夷志略』の記録により、よく知られるところである。福建路の市舶の提举（監督官）・趙汝适『諸蕃志』（宝慶元年（一二二五年））には、当時

陶磁器から見た海域アジア（徳留）

五六カ所にのぼるアジア、アフリカの国・地域と貿易を行っていたことが記されている。このうち陶磁貿易が行われていた国・地域が一五カ所記載され、それらは現在のベトナム、カンボジア、マレーシア、インドネシア、フィリピン、インド、東アフリカのタンザニアといった地域である。このうち三つの地域に対して青磁器（渤泥）、青白磁（蘭婆）、白磁器（西龍宮）とより具体的に種類が記載されており、青磁、青白磁、白磁が商品として用いられていたと言える（中国硅酸塩学会一九八二（一九九一）、二八一頁）。さらに汪大淵『島夷志略』（至正九年（一三四九年））では五〇カ所以上の国・地域へ中国陶磁が輸出されていたことが記されている。また輸出された陶磁器は、「青磁（青器を含む）」「青白花磁器」「青白磁」「処州磁器（処磁を含む）」の四種類があったことが記されている。このうち「青磁」「処州磁器」は、龍泉窯（系）青磁、「青白磁」は景德鎮窯（系）青白磁であることは多くの研究者間で共通見解となっている。「青白花磁器」に関しては、刻劃花青白磁と考える説と青花磁器であるとの説がある（陳万里一九五九、中国硅酸塩学会一九八二（一九九一））。後者であれば、いわゆる至正様式のものなのか、あるいは至正様式初期（またはそれ以前）のものを指すのかについては未解決の課題となっている¹⁾。ただし後述するように東南・南・西アジア地域において至

正様式の青花磁器が出土している事例が増えるにつれ、『島夷志略』の中の「青白花碗」「青白花器」は景德鎮窯青花の製品であるという認識が一般的になっていっている。いずれにせよ少なくとも宋時代には青磁、白磁、青白磁、そして元時代の一四世紀の中頃には青花磁が貿易陶磁器の中に加わり、アジア・東アフリカの各地へ流通していたということになる。

三 中国東南沿岸域の沈船から引揚げられた中国陶磁 ― 福建・広東沿岸および西沙諸島

先に見た古文獻に見られる、白磁、青磁、青白磁、青花磁は東南アジア、南アジア、西アジアへ輸出されたという視点で考えると、それらの製品の産地はどこであれ、中国国内で集積され、最終的に積み出しされる港は泉州や広州ということになる。ここでは中国東南沿岸地域の沈船から引揚げられた製品と組成について整理しておく（附図1・2）。福建沿岸地域で発見されている沈船は大きく福州、莆田、泉州、漳州の海域で比較的まとまって確認されている（国家文物局水下文化遺産保護中心等二〇一七）。それぞれ積み荷となっている主な陶磁器の種類は沈船ごとに異なる傾向があるが、全体としては五代から清代初期までを産地別

表1 福建沿岸地域の沈船から引揚げられた中国陶磁の種類
（国家文物局水下文化遺産保護中心等 2017 の p391 表一をもとに作成）

	浙江	江西	福建	江蘇
五代	越州窯青磁			
北宋後～南宋初	龍泉窯青磁			
南宋～元	龍泉窯青磁	景德鎮窯 青白磁	黒釉器、青磁、白磁	宜興産醬釉罐
明中期		景德鎮窯 民窯青花		
明後期～清初		景德鎮窯 民窯青花	漳州窯青花・五彩、 徳化窯、邵武四都窯 白磁	

※1：福建沖の元時代の沈船からは白磁（枢府手）と青花は発見されていない。

に見ると表1のようになる。

本論で議論の中心とする一三世紀から一四世紀頃に着目すると、北宋後期から南宋初期では龍泉窯青磁、南宋から元時代では龍泉窯青磁、景德鎮窯青白磁、宜興窯の醬釉罐、そして福建地域で焼造された黒釉や做龍泉窯青磁、做景德鎮窯青白磁などの製品が主な船の積み荷である。つまり全体的な組成は、先に見た古文獻で記載されているような陶磁器が実際に積み荷となっていたと言える。しかし元青花を積み荷としていた例は福建沿岸では今のところは発見されていない。これは沈船の輸送の目的や目的地の違いにより積み荷はそれぞれに異なっており、すべての沈船が同じような陶磁器の組成とはなっていないことや沈船の年代に由来する可能性もある。そこで次ぎに各報告書の記載を参考に詳細を見ておきたい。地域ごとの積み荷の組成に注目するために海域ごとに見ていく。

(一) 福州海域

福州沿岸では平潭の周辺を中心に白礁一号沈船（定海沿岸）、大練島西南嶼水下文物点、大練島元代沈船、小練島東礁村水下文物点が確認されている。

①平潭大練島西南嶼水下文物点（国家文物局水下文化遺産保護中心等二〇一七）で検出された陶磁器は、龍泉窯青

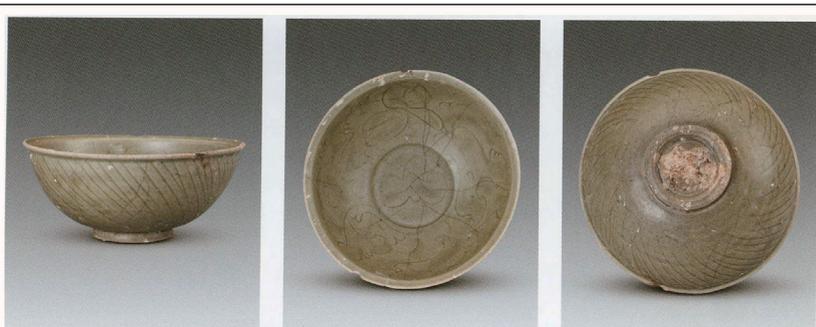


図1-1 青磁碗（西南嶼:2）



図1-2 青磁碗（西南嶼:4）



図1-3 青磁盤（西南嶼:6）

図1 平潭大練島西南嶼水下文物点で引揚げられた陶磁器

磁である。それらの多くは碗であり、器の外面には楯描文、内面には刻花草花文が施されるもの(図1-1)、器の外表面は無文で内面に刻花草花文が施されるもの(図1-2)が数多く見られる。また内底に刻花草花文を施した青磁小盃・小皿(図1-3)も検出されている。これらは一二世紀中頃から後半期の製品であり、龍泉東区などでも焼造されているが(浙江省文物考古研究所編二〇〇五)、当該沈船で発見されたような質の高さ、北宋後期は龍泉南区での生産が中心(鄭建明二〇一九)であったことをあわせて考えると、これらの製品は龍泉南区の金村窯の可能性が高いと考えられる。このような龍泉窯青磁刻花碗は、日本でも博多遺跡群などで一二世紀中頃から後半にかけて出土量が増加していることが知られる(田中二〇一九)。

沈船が検出された地点は福州市からやや南に位置する平潭県大練島の海域にある。福州に近い海域での沈船事例にもかかわらず、国外向けに流通していた福州を流れる閩江流域産の白磁などが積み荷の中に入っていないことは、龍泉窯青磁の流通ルートを考える上で非常に重要な沈船資料ということになる。沈没している地点を考えると、龍泉から寧波に運ばれた後に、日本へ向かうルート上で沈没したものであるとは考えにくい。同報告書にもあるように福建南部の港湾都市(泉州、漳州、広州等)や澎湖列島、台湾

向けの航路(王・劉二〇一〇、森二〇一三b、二〇一九)上にあつた可能性が考えられる。

②白礁一号沈船は閩江河口域の北側、福州市連江県定海村の東北側、白礁付近で発見された(趙・呉二〇一一)。二六七八件の陶磁器が引揚げられたが、黒釉碗(盞)が圧倒的に多く、次に(青)白磁碗類が多い。黒釉碗は高台が口径との割合で見ると小さく、胴部中央部分でやや内側に湾曲し、頸部にかけて広がり、口縁部が甕口状を呈するもの(図2-1)が多い。閩江流域に所在する閩侯窯や福清東張窯の製品の可能性が高く、これらは博多などでも出土する。また(青)白磁は碗・鉢・皿が多く、粗製で施釉後に内底は蛇の目状に釉剥ぎし、外面は胴部中央付近まで施すものも少量見られる(図2-3)。南宋後期から元時代の沈船で、積み荷は圧倒的多数の閩侯あるいは福清東張窯の黒釉碗と連江浦口窯白磁の組み合わせである。当該沈船の積み荷は、閩江流域の窯の製品であることから福州を出発した船で、その組成から北方(寧波)、南方(福建の南方の港や東南アジア)のどちらへも向かう可能性があつた船と考えられる。

③平潭大練島元代沈船は、平潭県海壇島西北のさらに西



図2-1 黒釉碗(蓋) (95DHBj1・0G12:25)



図2-2 (青)白磁碗(95DHBj1・0G2:84)



図2-3 (青)白磁碗(90DBCT1A:1)

図2 白礁一号沈船で引揚げられた陶磁器



図3-1 青磁碗
(07大練島:176)



図3-2 青磁碗
(07大練島:237)



図3-3 白磁碗
(07大練島:171)



図3-4 青磁洗
(07大練島:190)



図3-5 青磁小罐
(07大練島:30)



図3-6 青磁大盤
(07大練島:133)



図3-7 青磁大盤
(07大練島:151)



図3-8 青磁大盤
(07大練島:243)



図3-9 青磁大盤
(07大練島:236)

図3 平潭大練島元代沈船で引揚げられた陶磁器



図4 平潭小練島東礁村水下文物点で引揚げられた陶磁器

北側の大練島の西面に所在する（中国国家博物館水下考古研究中心等二〇一四）。当該沈船からは六〇〇件以上の陶磁器が引揚げられ、その多くは龍泉窯青磁であり、それ以外に陶罐、陶瓦などが若干見られる。

龍泉窯青磁は主に碗、盤、大盤、洗、小罐などである。施文方法は刻花、印花、貼花などがあり、文様も水波、巻草、花卉（蓮花、牡丹、菊花）、双鱼、龍文、松鶴、侍女などの図案が見られる。碗類の胴部形態はいずれも腰部が丸みをおびるが、口縁が端反りで高台裏を蛇の目釉剥ぎするもの（図3-1）、高台裏全体を釉剥ぎするものがある（図3-2）。また龍泉窯ではなく、福建産の白磁の可能性がある碗が一点報告されている（図3-3）。大盤は、口縁部分が幅広でいわゆる折縁（鏝縁）盤には施釉方法が高台畳付を釉剥ぎするもの（図3-6）と、高台裏を蛇の目釉剥ぎするものがある（図3-7）。口縁部が内傾する大盤（図3-8）と直口する大盤（図3-9）は高台裏を蛇の目釉剥ぎしているものが見られる。また鉢・皿状の洗はいずれも折縁口縁で高台畳付が釉剥ぎされている（図3-4）。このほか東南アジア地域で数多く出土している双耳小壺（図3-5）が多数発見されている。

以上、平潭大練島元代沈船の陶磁器を見てきたが、そのほとんどが元時代龍泉窯青磁である。報告書では、当該沈

船から検出された龍泉窯青磁は韓国新安沈船のそれらと類似した形態的特徴であり、また二〇一〇年にインドネシア海域で発見されたJade dragon号から引揚げられた龍泉窯青磁と類似することから、当該沈船は元時代中後期、一四世紀前半から後半のものであり、最終的な目的地は東南アジアの可能性はあるが、市舶司のある泉州（集積地・集散地）へ向けて福州あるいは温州から出航した船であるものと推測されている（中国国家博物館水下考古研究中心等二〇一四、一八六頁）。

④平潭小練島東礁村水下文物点では、青磁、白磁（青白磁）、黒釉磁、青花磁器が確認されている。引揚げられた陶磁器は、北宋時代後期から明代中期まで時期幅が広いが、青花や白磁（青白磁）のいくつかのタイプは極めて数が少ないことから、異なる時代に廃棄された製品があわせて引揚げられたと報告ではまとめている。青磁は龍泉窯の蓮弁文碗が見られるが、蓮弁の幅が比較的広く角高台に近いタイプ（図4-1）、高台裏まで施釉され、畳付が釉剥ぎされ露胎で、蓮弁の幅がやや狭いタイプ（図4-2）などが見られる。また口縁部が内傾し、胴部に蓮弁文を施す鉢（図4-3）や折縁で内面に双鱼文を貼付けた盤（図4-4）なども見られる。さらに内底に印花で草花文を施し、蛇ノ目状に釉剥ぎする碗（図4-5）も見られる。角高台の碗は

やや時期的に古い様相を呈するが、その他の青磁は基本的には一三世紀の元時代に多い製品である。この他、福建の莆田莊辺窯の製品と思われる青磁（図4-6）も若干見られる。青磁は多くは龍泉窯青磁で若干の福建産のものと同み合わさっている。

白磁・青白磁については報告書では年代別により大きく四つのグループに分けている。一組目は北宋時代後半の高台が高く、口縁部が外に開き刻花文を施す閩清義窯産の碗（大宰府分類の白磁碗Ⅴ類）、二組目は南宋前期に見られる見込みに小さい鏡を作る碗（図4-7）であり、それぞれ一点ずつ確認されている。極めて数が少ないため別の時代の沈船などの資料の可能性が高いとしている。三組目は口禿げの印花文碗・盤（皿）類であり、景德鎮窯あるいは建窯などの福建北部の青白磁であると推測されているものである（図4-8）。南宋時代後期頃の製品と考えられる。当該沈船資料の中で最も多く見られる陶磁器は四組目のものになるが、一四世紀の元時代に見られる碗である。いずれも粗製の白磁で、東南アジアや沖縄で数多く見られる閩清義窯産のピロースクタイプ碗（図4-9）、内外面無文で外面の胴下部付近まで施釉し、その下部は露胎の碗（図4-10）、また外面に粗い刻花蓮弁文を施す碗（図4-11）が見られ、後二者は数量も多く閩江の河口に近い連江浦口窯



図5-1 青磁碗
（北土亀礁一号:5）

図5-2 青磁碗
（北土亀礁一号:4）

図5 北土亀礁一号沈船で引揚げられた陶磁器

の製品と思われる。この他、比較的精緻な印花花卉文の盤なども見られる(図4-12)が福建の在地産であると思われる。

黒釉碗も検出されているが、腰部胴中央にかけてやや内側に湾曲し口縁下部にかけて広がる碗(図4-13)、器高よりも口径が大きい鉢形を呈する碗(図4-14)が見られる。いずれも胴部中央付近までしか施釉されず、胴下部から高台裏にかけて無釉で露胎となっており、前者は福清東張窯等で南宋から元時代に後者は南平茶洋窯で元時代に見られるタイプである。三点のみの検出事例であり、この沈船のもともとの積み荷でなかった可能性もある。このほか、醬釉と称される褐釉陶器が数多く確認されており、肩部に双耳をもつもの(図4-15)ともたないものが見られる。これは江蘇省の宜興窯あるいは浙江省の徳清成年塢窯の製品と考えられているいわゆるコンテナとしての容器である。

平潭大練島西南嶼水下文物点で検出された陶磁器の組成から、いくつかは異なる時期の陶磁器資料が含まれるものの、基本的には元時代の沈船資料であり、その積み荷の組成は龍泉窯青磁、福建莆田窯等の做龍泉窯青磁の碗や瓶、連江窯の白磁(青白磁)と陶製のコンテナ容器ということになる。注目しておきたい点として、福州の南に位置する地点で龍泉窯青磁と閩江流域産の製品と莆田地域の製品が積み荷の組成となっている点である。

(二) 莆田海域

莆田海域には北土龜礁一号沈船、北日岩一号水下文物点、湄洲灣門峽嶼水下文物点、湄洲島文甲大嶼水下文物点、北土龜礁二号水下文物点、北日岩四号水下文物点、北日岩五号水下文物点を確認されている。

⑤北土龜礁一号沈船は興化湾の南側の南日島の東北側で発見されている(国家文物局水下文物点文化遺產保護中心等二〇一七)。陶磁器は青白磁と陶器が一点ずつ検出されている以外はすべて青磁で、櫛描文青磁碗が多く、その他、劃花文碗、無文碗・皿などが見られる。これらの櫛描文青磁はいわゆる龍泉窯・同安窯系青磁0類(図5-1)と同安窯系青磁1類に該当する碗(図5-2)であり、龍泉窯系・同安窯系青磁0類は一二世紀後半から一二世紀前半頃、同安窯系青磁1類も一二世紀中頃に主に生産されていたものである。このタイプの製品は福建各地で焼造されており、産地を特定することはかなり難しいが、少なくとも龍泉窯の龍泉南区(金村窯址)と福建北部の松溪窯、あるいは福州に近い莆田窯や福清窯などで見られる。日本には金村窯址のほか、莆田窯、福清窯などの製品が伝来している可能性がある(徳留等二〇一九)が、それらのいくつかは碗の高台裏の削りが粗く、兜金状になっているものが特徴である。本沈船から引揚げられたこれらの櫛描文青磁碗は、高

台裏の削りが丁寧に平坦に整えられており龍泉窯産の精緻なものか、松溪窯の製品の可能性が高いものと考えられる。当該沈船からは多数の北宋中後期の銅銭（大観通宝、祥符通宝、熙寧通宝）の他、南宋前期の紹興通宝（一一三一—六二年）も検出されており、沈船の年代としては南宋前期頃であると思われる。

⑥南日島北日岩一号水下文物点は、莆田市の小日島の西北に位置している。青白磁の口禿げの碗・盤、瓶が検出されている。おそらくは景德鎮産と思われる、斗笠蓋形で内面に雷文、花卉文を印花で表した碗（図6-1）と双魚文や魚を三匹配した印花文の盤（図6-2）などが見られ、類品が江西省南昌の南宋紹熙五年墓（一一九四年）に見られる（彭适凡主編一九九八）。引揚げられた陶磁器の数が少ないことから詳細は不明であるが、莆田の興化湾以南の港湾都市か台湾・澎湖地区への輸送の途中にあった可能性を報告書では指摘している（国家文物局水下文文化遺産保護中心等二〇一七、三七四頁）。

⑦湄洲湾門峽嶼水下文物点は莆田市秀嶼区東埔鎮東吳村東南、湄洲湾の北側に位置している（国家文物局水下文文化遺産保護中心等二〇一七）。主に陶器で褐釉の罐、甕、壺類のほか、青白磁碗が若干発見されている。青白磁に関しては釉薬がすでに剥けており、産地等に関しては不詳であ



図6-1 青白磁碗（北日岩一号:8）



図6-2 青白磁盤（北日岩一号:10）

図6 南日島北日岩一号水下文物点で引揚げられた陶磁器

る。陶器類に関しては、湄洲湾南部の惠安銀厝尾窯産の製品と考えられており、その沈船の年代に関しては元時代と考えられている（福建省博物館一九九三）。

⑧湄洲島文甲大嶼水下文物点は、莆田市湄洲島の北面に位置し、（青）白磁が数多く引揚げられており、一部青花磁と醬釉磁も検出されている（国家文物局水下文文化遺産保護中心等二〇一七）。



図7 湄洲島文甲大嶼水下文物点で引揚げられた陶磁器

白磁碗類は内外面無文で、高台の畳付・高台裏の成形が粗く、外面高台付根付近あるいは腰あたりまで施釉し、それより下部は無釉で露胎のもの（図7-1）、ほぼ類似する特徴で外面に刻花で粗い蓮弁文を施す碗（図7-2）がほ

とんどである。先述した平潭小練島東礁村水下文物点でも見られた連江浦口窯産の白磁である。また青白磁盤も口禿げで内面に印花纏枝菊花文を施すもの（図7-3）と青磁で内面に刻花蓮花文を施す盤が引揚げられている（図7-4）。青白磁盤は南宋後期から元時代頃の景德鎮窯産あるいは福建産の做景德鎮窯青白磁であり、福建産であれば閩北の窯のものである可能性が高いと思われる。

以上、当該沈船の積み荷は、元時代の連江浦口窯の製品が中心で、景德鎮窯（系）青白磁の組合せということになる。

⑨北土龜礁二号沈船は興化湾の周辺域に所在し、盗掘を受けていないため保存状態が良い沈船資料である（国家文物局水下文化遺産保護中心等二〇一七）。陶磁器はいずれも（青）白磁の碗、盆、碟（小皿）類である。それらは器には内底まで釉が施釉されるものと、内底部は施釉されないものがあるが、いずれも外面は下半部から底部裏にかけて無釉で露胎であり、高台の作りや削りも粗く、平潭小練島東礁村水下文物点や湄洲島文甲大嶼水下文物点で確認された粗製の白磁碗同様に、元時代の連江浦口窯（あるいは莆田莊辺窯）の製品であると思われる。このため当該沈船の積み荷は福建産の粗製品ということになるが、連江浦口窯や莆田莊辺窯の粗製品も福建地域内で流通していただけでなく、琉球や台湾、東南アジアにも流通しており（森本

二〇〇九）、この沈船の目的地も両方の可能性がある。

⑩南日島北日岩四号水下文物点は莆田南日鎮小日島西北面の海域に所在している（国家文物局水下文文化遺産保護中心等二〇一七）。北土龜礁二号沈船同様に（青）白磁の碗類が中心である。報告されている資料だけ見ると碗の内底を蛇ノ目釉剥ぎしているものが多いが、連江浦口窯あるいは莆田莊辺窯の製品であると思われる。

⑪南西島北日岩五号水下文物点は北土龜礁二号沈船の南側に位置する（国家文物局水下文文化遺産保護中心等二〇一七）。（青）白磁、黒釉磁、青花などが検出されている。白磁碗の中には腰が張り、口縁部が斜め直口に開くもの（図8-1）と端反りのもの（図8-2）がある。いずれも型で成形されており、徳化窯あるいは莆田靈川窯の製品であると思われる。また当該沈船からも南日島北日岩四号水下文物点で検出した連江浦口窯あるいは莆田莊辺窯産の粗製の（青）白磁碗が見られ、その数量は先の徳化窯（あるいは莆田窯）のそれよりも多い（図8-3）。この他、器高が口径よりも小さく高台裏が平坦な作りの黒釉碗も見られる（図8-4）。この黒釉碗に関しては晋江磁窰窯産の可能性が高い。このことから、当該沈



図8-1 白磁碗（北日岩五号:5）



図8-2 白磁碗（北日岩五号:2）



図8-3 青白磁碗（北日岩五号:7）

図8-4 黒釉碗（北日岩五号:4）

図8 南西島北日岩五号水下文物点で引揚げられた陶磁器

船は徳化窯の白磁、連江浦口窯・莆田莊辺窯の粗製白磁、磁竈窯の黒釉碗などが積み荷の組成となっていたと言える。

(三) 泉州海域

⑫後渚港沈船は、泉州港の主要な港の一つであり、後渚村付近で検出された。船体が残存し、船体上部から青磁、白磁、黒釉陶器、醬(褐)釉陶器などが出土しており、五八件復元されている(福建省泉州海外交通史博物館編一九八七)。

青磁は碗が多く、櫛描文青磁、龍泉窯青磁刻花碗(外面無文、内面刻花文)、龍泉窯青磁蓮弁文碗など異なる複数の時期の陶磁片が確認されている。また青磁小壺の蓋で、縁が波打った蓮葉状の蓋が見られるほか、水注(ケンダイ)などが発見されている。共存している銅銭の年代から一二七一年以降に沈没した南宋末期の沈船だと考えられている。青磁の蓮葉状の蓋の形態からも南宋末から元代初期頃のものと思われる。

(四) 漳州海域

⑬龍海半洋礁一号沈船は龍海市隆教畚族郷東南海域の東碇島付近に所在する(国家文物局水下文化遺産保護中心等

二〇一七)。陶磁器を中心に、銅器、漆器や木器なども検出されている。陶磁器は黒釉碗が主で、青白磁碗・盤(皿)なども見られる。

黒釉碗は竈口で高台が小さく、胴部は腰から胴中央にかけて内側に弧状を描きながら頸部にかけて外に開くタイプで、釉は腰下付近まで掛ける。胎はやや赤褐色を呈している。連江定海白礁一号沈船からも数多く発見されているが、一三世紀後半の福清東張窯産か閩侯窯産の可能性が高い製品である。青白磁碗の中には胎がかなり白く、高台まで施釉されており、印花文様で口禿げの一群が見られ(図9-1、2)、将楽南口窯の製品の可能性が同報告書で指摘されている。また胎土がやや灰白色を呈し、型作りによる口禿げの青白磁は莆田靈川窯産とされている(図9-3、4)。また同様の胎の特徴で、器の内壁には篋点刻花文、内底は蛇ノ目釉剥ぎした莆田莊辺窯産と思われる碗も見られる。東張窯の黒釉碗(図9-5)は後述する広東南海一号沈船、西沙群島華光礁一号沈船からも発見されている。日本にも博多遺跡群なども出土しているが、龍海半洋礁一号沈船は黒釉碗が生産された福清からかなり南に位置していることから、これらの積み荷は東南アジアへ向けて輸出されていたものと思われる。このほか褐釉の水注(図9-6)や青釉褐彩盆(図9-7)が見られる。筆者は磁竈窯の盤の可



図9-1 青白磁碗
(半洋礁一号:18)



図9-2 青白磁碗
(龍海博:1288)

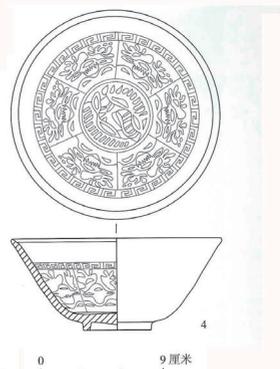


図9-3 白磁碗 (半洋礁一号:23)



図9-4 青白磁碗 (半洋礁一号:28)



図9-7 陶盤
(龍海博:1015)



図9-5 黒釉碗
(半洋礁一号:3)



図9-6 陶壺
(半洋礁一号:35)

図9 龍海半洋礁一号沈船で引揚げられた陶磁器

可能性もあると考えるが、報告書では福清東張窯産の可能性を指摘している。莆田莊辺窯の白磁がやや時期的に他と比べて古い可能性があるが、基本的には当該沈船で見られる製品の特徴は南宋時代後期から元時代初期の頃であるものと想定される。また積み荷の組成は福清東張窯の黒釉碗、将楽南口窯と莆田靈川窯・莊辺窯の（青）白磁といえる。

⑭漳浦沙洲島沈船は漳浦県古雷半島の東南部からさらに西に約5kmの海域で発見された。陶磁器は青磁、青白磁、醬釉などが見られる。最も数量的に多いのは青白磁とされている（国家文物局水下文化遺産保護中心等二〇一七）。報告書の中では青白磁として扱われているものの中に青磁と思われる一群があり、多くは身の深い碗であり、その他は浅めの鉢に近い碗や盤などである。身の深い碗は外面には口縁部下に沈線文を施し、胴下部には刻花蓮弁文を一周巡らす。内外面に青磁釉を施すが、内底は比較的丁寧な蛇の目釉剥ぎを行い、外面は高台置付から高台裏以外は施釉されている（図10-1）。また身の浅い鉢形碗は、内底と外面の胴下部から高台裏は無釉で露胎であり、重ね焼きするために内底を蛇ノ目状に胎を削っているものが多い。また類似した特徴をもつ盤（皿）の内底には印花による文様を施すものも見られる（図10-2）。これらは報告書の中では龍泉窯である可能性が指摘されているが、同様の特徴の製

品は龍泉窯青磁にはないと思われることから、具体的な窯は判然としないが、福建産の做龍泉窯青磁として位置づけしておく。

白磁・青白磁は福建産と景德鎮窯産のものが見られる。福建産のものとしては、胎は緻密な灰白色で外面に上述した青磁碗のような蓮弁文を配した莆田莊辺窯と思われる炉がある（図10-3）。景德鎮窯産は高台が餅状と言われるべた底に近いもので、外面は無文か印花による花卉文を施す小杯（図10-4）、さらに質の高い製品と思われるが、釉薬の光沢も鮮やかで胴部に刻花蓮花文の水注（図10-5）、瓜形や八角形の胴部で印花文を施した水注なども多く見られる。これらの中には胴下部に芭蕉文を配するものがあるが（図10-6）、その意匠は景德鎮青花に表される芭蕉文とも類似しており、青花の至正様式が成立して以降のものと考えられるが、後述するように本沈船の積み荷には元青花は見られない。さらに類似した特徴を有する小罐（図10-7）などがある。また質感はやや異なるが三足の香炉なども見られ（図10-8）、いずれも一四世紀代の特徴を有している。この他、醬釉陶器類も引揚げられているが、大きめの四耳罐で肩部に「異宝」銘を押されているもの（図10-9）や元時代の龍泉窯青磁にも同形のものが見られる小形の四耳壺（図10-10）などが見られ、晋江磁窰窯産であると思

陶磁器から見た海域アジア（徳留）

われる。

以上のことから、漳浦沙洲島沈船は一四世紀半ばから後半頃の年代であると思われる、積み荷の組成は、景德鎮青白磁が中心で、莆田莊辺窯白磁、在地（あるいは龍泉窯）の青磁と晋江磁窰窯の醬釉器ということになる。先述したよ

うに、景德鎮窯青白磁は芭蕉文などの意匠から元青花至正様式が成立して以降のものであると考えられるが、青花磁器は積み荷の中に入っていない。このことは注目しておきたい。



図10-1 青白磁碗
(沙洲島: 8)



図10-2 青磁碗 (沙洲島: 15)

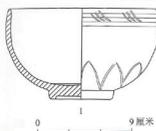


図10-3 青白磁炉
(沙洲島:1006)



図10-4 青白磁小杯 (沙洲島:993)



図10-5 青白磁水注
(龍海博:969)



図10-6 青白磁水注 (龍海博:974)

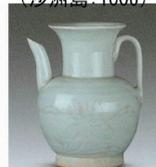


図10-7 青白磁小罐 (龍海博:981)



図10-8 青白磁炉
(沙洲島:13)



図10-9 醬釉四耳罐 (沙洲島:14)



図10-10 醬釉四耳罐
(沙洲島: 4)



図10 漳浦沙洲島沈船で引揚げられた陶磁器

(五) 広東・西沙諸島

⑮ 南海一号沈船は一二世紀末から一三世紀初の南宋中期の沈船である(国家文物局水下文化遺産保護中心等二〇一七)。陶磁器の積み荷の組成としては龍泉窯青磁、景德鎮青白磁の他、福建産の陶磁器などからなる。とくに二〇一四年から二〇一五年度の調査結果では福建の製品は徳化窯、磁窰窯、閩清窯など多く見られると報告されている。以下に報告による所見をもとに南海一号沈船の積み荷の様相をまとめておく。

全体の種類としては碗、盤、碟(小皿)、壺、瓶、罐、盆、水注、盒、磁器製の彫塑などが見られる(図11、12)。景德鎮青白磁は数量も多く、碗、盤、盒類が中心となっている(図12)。碗・盤は刻花、印花文により施文され、また口禿げのものも見られる(図11-

史苑(第七九卷第二号)

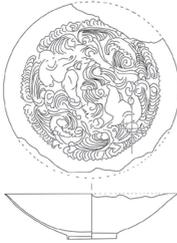


図11-1 青白磁碗
(T0502④:0585)



図11-2 青白磁碗
(T0402②:450)

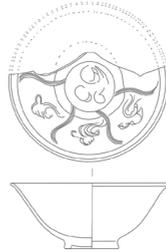


図11-3 青磁碗
(T0101③:0057)

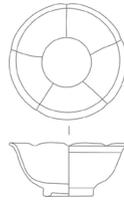


図11-4 青磁碗
(T0302③:0072)



図11-5 青磁鉢
(C14a①:0872)



図11-6 青磁鉢
(T0302③:0179)

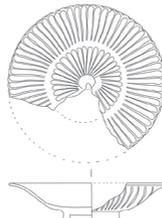


図11-7 青磁皿
(C10c①:0032)



図11-8 青磁四方瓶
(C10①:0197)

図11 南海一号沈船で引揚げられた陶磁器①

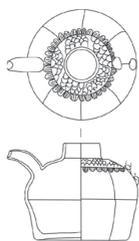


図12-1 白磁水注
(T0402②:72)

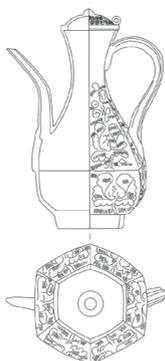


図12-2 白磁水注
(T0301②:10)

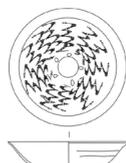


図12-3 白磁碗
(C13a①:2123)



図12-4 白磁碗
(C12 a①:0308)



図12-5 白磁壺、瓶



図12-6 白磁盒
(T0302③:449)



図12-7
緑釉碟（小皿）
(T0302③:0033)



図12-8 緑釉
褐彩水注
(T0402④:0050)



図12-9 緑釉
褐彩長頸瓶
(T0402②:0080)



図12-12 青磁碗
(C9c②:0303)



図12-10 醬釉四耳壺
(C9c①:0004)



図12-11 黒釉碗
(T0501④:0285)

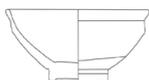


図12-13 青磁碗
(C14①:1028)

図12 南海一号沈船で引揚げられた陶磁器②

1、2)。龍泉窯青磁は碗が最も多く、盤がそれに次ぎ、一件のみであるが方瓶が見られる(図11-3、8)。施文方法は刻花によるものが主要である。また厚胎薄釉のものが多し。福建産陶磁は徳化窯(碗坪窯)産の白磁の数量が多く、種類は器蓋、壺、水注、三足炉、碗、罐、四耳罐、碟、粉盒、大盤、葫芦瓶、ラッパ口瓶などである(図12-1、6)。水注、罐、ラッパ口瓶などは型作りで、胴の上・下半を別作りし接合し成形している。文様は印花による花卉文が多く、盤などには篋刻文なども施されている。晋江磁窰窯は醬釉のものが多く、その次ぎに緑釉、さらに黒釉、青釉のものが若干見られる(図12-7、10)。器種は罐、瓶が主で、その他に器蓋、碗、粉盒、水注(ケンディー)、緑釉の印花碟、玉壺春瓶、ラッパ口瓶、長頸瓶などがある。閩清義窯に関しては刻花文を施した碗類が多い。その他、福清東張窯の黒釉碗(図12-11)や、福建産であるが具体的な窯址が分からない(おそらく閩江流域の窯の製品)外面櫛描文、内面に刻花文を施した青磁碗(図12-12、13)なども見られる。

⑬華光礁一号沈船は海南省西沙諸島群華光礁環礁の内側で検出された一二世紀中葉から後半・南宋前期の沈船である(中国国家博物館水下考古研究中心等二〇〇六。湖南省博物館編二〇一一)。華光礁一号沈船の陶磁器の組成は泉

史苑(第七九卷第二号)

州地区の徳化、南安、晋江等の製品、例えば做龍泉窯青磁、青白磁、白磁、黒釉碗(天目)、磁窰窯の醬釉や鉛釉陶器などが多く、一方で龍泉窯青磁や景德鎮窯青白磁は少量となっており(図13)、先述した南海一号とは異なる傾向にあることが指摘されている(郝思徳二〇一一、三三一三四頁。森二〇一三b、八六頁)。

南海一号沈船も華光礁一号沈船も、積み荷となっている陶磁器の産地別の組成は異なるが、いずれも龍泉窯青磁、景德鎮窯青白磁、福建産の陶磁器となっており、泉州港を出港し東南アジアを目標していた船であったことを各調査報告書(者)らが推定しているが、筆者も同様の見解である。また西沙北礁からは華光礁一号沈船以外にも元時代の龍泉窯青磁盤・皿などが引揚げられている(湖南省博物館編二〇一一)。

⑭石嶼二号沈船は西沙諸島永樂環礁東部に所在し、当該遺跡からは、青花、卵白釉磁、白磁、青磁(青灰釉)、醬釉磁など四〇五件が引揚げられた(中国国家博物館水下考古研究中心等二〇一一)。

青花は碗(図14-1)、杯(図14-2)を中心に、梅瓶、玉壺春瓶(図14-3)、罐(図14-4)や蓋(図14-5)、軍持(水注)なども見られる。青花はフィリピンをはじめ東南アジアに流通している小形の製品が多く見られる。青花



図13-1 青白磁水注



図13-2 青白磁瓶



図13-3 青白磁盒



図13-4 青白磁鉢



図13-5 青磁碗



図13-6 青磁櫛描文碗



図13-7 青磁碗



図13-8 青磁碗



図13-9 青磁碗



図13-10 醬釉水注

図13 華光礁一号沈船で引揚げられた陶磁器

の文様には鴛鴦蓮池文、蓮文、纏枝菊文、折枝菊文、蓮弁文、卷草文、火焰文、「寿」字文などが見られる。卵白釉の製品はその胎はやや灰白色で青花のそれと類似する。碗、杯などが検出されており、内面には印花文で文様を施すものもある。碗には折腰碗（図14-6）や腹部は張るタイプのものが見られる。杯の形態は青花の杯と同様に広口のものが見られる（図14-7）。白磁は碗、洗、盤（図14-8）、盒（図14-9）、罐（図14-10）などが見られ、型作りで印花による文様が見られる。青磁は釉色が白磁にも近い粗製の青磁である。碗、盤、碟（小皿）などがあり、釉は内底が蛇ノ目釉剥ぎ、外面は底部までは施されておらず、無釉で露胎である（図14-11）。見込みには印花により



图14-1 青花碗 (SW2:195)



图14-2 青花杯 (SW2:199)



图14-3 青花玉壺春瓶 (SW2:193)



图14-4 青花双耳小罐 (SW2:243)



图14-5 青花盖 (SW2:264)



图14-6 卵白釉碗 (SW2:220)



图14-7 卵白釉杯 (SW2:196)

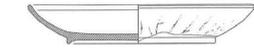


图14-8 白磁盤 (SW2:178)



图14-9 白磁盒（盖） (SW2:181)



图14-10 白磁罐片 (SW2:179)



图14-11 青磁碗片 (SW2:118)



图14-12 醬釉小口瓶片 (SW2:109)

图 14 石嶼二号沈船で引揚げられた陶磁器

花卉文を施しているものもある。このほか醬（褐）釉の小口瓶（図14・12）や罐などが引揚げられている。青花と卵白釉磁は景德鎮窯、型作りの白磁は徳化窯の屈斗宮窯、青磁は莆田莊辺窯であると思われる。また醬釉陶器類は晋江磁窰窯とされている。当該沈船の積み荷の組成は元時代の景德鎮青花と卵白釉を中心に、さらに福建の徳化窯白磁、莆田窯の粗製の青磁、晋江磁窰窯の醬釉陶である。

以上、中国東南沿岸地域で確認されている各沈船から検出された陶磁器について見てきた。それぞれの沈船の積み荷の組合せをまとめたのが表2である。表1で示したようにあるいは先行研究でも指摘されているように、輸出されている陶磁器の組成は龍泉窯青磁、福建陶磁、景德鎮青白磁で構成されており、南宋時代末から元時代初期の一三世紀後半頃からは高品質の龍泉窯の製品も輸出される（森二〇一〇）。沈船資料の中でも、中国国外の目的地へ航行し、その途中で沈没した広東沖や西沙諸島の沈船資料はそのことが顕著に示されていた。一方で、福建沖で発見された沈船資料を見ると、その状況は若干異なっている。それは龍泉窯青磁が中心であったり、福建の閩江流域や莆田地域の窯の製品の組合せであったり、景德鎮窯青白磁を中心とするものであったりと様々であり、流通のあり方が非常に複雑であったと言える。これは交易を扱う商人の違いや

陶磁器が国内流通なのか中国国外を目的としていた貿易船であったのかといった輸送・流通の目的とも関係係しているものと思われる。

福州海域で発見された定州白礁一号沈船をのぞくといずれも福州以南で発見されており、航路としてはより南方（泉州や広州。さらには東南アジア）あるいは澎湖諸島・台湾、琉球列島が目的地であったと考えられる。中でも福建産以外の陶磁器を積んでいた沈船は注目しておきたい。平潭大練島西南嶼水下文物点と平潭大練島元代沈船では積み荷のほとんどは龍泉窯青磁であり、龍泉窯で生産された青磁が温州あるいは福州へ一旦集積され、市舶司があり南宋時代に広州にかわり東南アジア・西アジア向けの最大の貿易拠点となった泉州（森二〇一三a、八七頁）、さらにはその後東南アジアへ向かうものであったと思われる。また景德鎮窯青白磁、福建の閩江流域および莆田・泉州の徳化窯などの製品、さらにはそれに加えて龍泉窯青磁を積み荷としている沈船が見られるが、温州から龍泉窯青磁（と景德鎮青白磁）を載せ、その後福州・莆田（興化湾）・晋江などの港にて福建産の製品（景德鎮青白磁は福州で載せている可能性はある）を載せて泉州、その後東南アジアへ向けて輸送された可能性を示している資料であると言える。貿易陶磁の流通に関しての福州港の重要性が近年指摘されてい

表2 中国東南沿岸地域の沈船の中国陶磁器の産地

番号	海域	沈船・遺跡名	時代	積み荷の主な中国陶磁器産地		
				浙江	福建	江西
①	福州	平潭大練島西南嶼	南宋	龍泉窯青磁		
②	福州	白礁一号	南宋～元		閩侯窯・福清東張窯 黒釉、連江浦口窯白磁	
③	福州	平潭大練島(元代)	元	龍泉窯青磁		
④	福州	平潭小練島東礁村	南宋末～元	龍泉窯青磁	莆田莊辺窯青磁、建窯青白磁、連江浦口窯白磁	景德鎮窯青白磁
⑤	莆田	北土亀礁一号	南宋前期		櫛描文青磁	
⑥	莆田	南日島北日岩一号	南宋			景德鎮窯青白磁
⑦	莆田	湄洲湾門峽嶼	元		青白磁、惠安銀厝尾窯	
⑧	莆田	湄洲島文甲大嶼	元		連江浦口窯白磁（または莆田莊辺窯）	景德鎮窯青白磁
⑨	莆田	北土亀礁二号	元		連江浦口窯白磁（または莆田莊辺窯）	
⑩	莆田	南日島北日岩四号	元		連江浦口窯白磁（または莆田莊辺窯）	
⑪	莆田	南西島北日岩五号	元		徳化窯白磁、連江浦口窯白磁（または莆田莊辺窯）、晋江磁甕窯黒釉陶	
⑫	泉州	后渚港	南宋	龍泉窯青磁（蓮弁文碗）、浙江諸窯（醬釉）	徳化窯（青白磁）、福建諸窯、連江浦口・莆田窯（青磁、白磁）、櫛描文青磁、晋江磁甕窯	
⑬	漳州	龍海半洋礁一号	南宋後期～元前期		閩侯窯・福清東張窯 黒釉陶、将楽南口窯 青白磁、莆田靈川窯、 莊辺窯	
⑭	漳州	漳浦沙洲島	元		倣龍泉窯青磁、莆田莊辺窯、晋江磁甕窯	景德鎮窯青白磁
⑮	漳州	聖杯嶼沈船	元中後期	龍泉窯青磁		
⑯	漳州	菜嶼沈船	元中後期	龍泉窯青磁	晋江磁甕窯 <small>カ</small> （醬釉）	
⑰	広州	南海一号	南宋中期	龍泉窯青磁	徳化窯、晋江磁甕窯、 閩清窯	景德鎮窯青白磁
⑱	西沙諸島	華光礁一号	南宋前期	龍泉窯青磁	徳化窯、南安窯、晋江磁甕窯の倣龍泉青磁、青白磁、白磁、 黒釉碗、醬釉陶	景德鎮窯青白磁
⑲	西沙諸島	石嶼二号	元		徳化窯白磁、莆田窯 青磁（青灰釉）、晋江磁甕窯醬釉陶	景德鎮窯青花磁、 卵白釉磁

陶磁器から見た海域アジア（徳留）

るが（栗二〇〇八、森二〇一三b、二〇一九）、この沈船の積み荷の組成は、まさに東南アジアあるいは台湾・琉球列島向けの陶磁器の流通において福州の集積地・集散地としての重要性の高さを示しているものと考えられる。

四 日本で出土する中国陶磁（表3）

一三世紀から一四世紀において日本列島で出土する中国陶磁は、先に見た沈船の積み荷の組合せと同様に、龍泉窯青磁、景德鎮窯青白磁、福建産の陶磁器が中心である（田中二〇〇八、森二〇一三b、徳留二〇一六）。ただし東南アジアでは徳化窯白磁が流通するのに対して、日本では徳化窯の製品は基本的に見られない（森本二〇〇九）。このことは、日本向けと東南アジア向けとは中国から出航する港が異なっていたことに由来することが指摘されている（栗二〇〇八、森二〇一三a）。また喫茶の風習が流行していた日本では、すでに中国では生産が行われていなかった福建建窯産の天目を輸入し続けていたことが、韓国新安沈船の積み荷の中に使用痕がある建盞が存在していることから指摘されている。青白磁梅瓶は、鎌倉時代の遺跡でよく見られる一方で、東南アジア向けの沈船、あるいは出土品ではほとんど目にするのではないことも特徴である（徳留

二〇一九）。さらに唐物と称され、茶の湯の道具、武家におけるステータスシンボルとしても長く重宝されながら、世代を超えて伝世していくことは日本における顕著な特徴であり、このように日本独自の様相が見られることは、中国陶磁器の需要における日本と東南アジア地域の人々との嗜好性の違いから生じているものと考えられる。

五 東南アジアで出土する中国陶磁

東南アジアや西アジアの地域で一三世紀から一四世紀にかけて流通した中国陶磁は龍泉窯青磁が多数をしめ、次に福建陶磁、景德鎮窯製品が比較的多く見られ、さらに南宋時代後半に減少していた広東陶磁や磁州窯製品などもわずかに見られることが指摘されている（森二〇一三a、九二―九三頁）。元時代の龍泉窯青磁、景德鎮製品も元朝の支配者層であるモンゴル人や西アジア人の嗜好を反映して大形の壺、盤、花瓶やコバルト顔料で絵付けを行い、その上に青白釉を施した青白磁の誕生を促すなど、中国国内の生産地へも大きな影響を与えていた時代である。

東南アジア地域で検出された一二世紀から一四世紀と思われる沈船の積み荷の陶磁器の組成を見ると（附表）、各船により比率は異なる可能性があるが、おおよそ

表3 宋元時代に日本で流通する中国陶磁器の様相
(田中 2008、森 2013b などを元に作成)

時代	主な製品と窯系	備考
12世紀後半 ～13世紀初 南宋前半	<p>青磁：龍泉窯青磁（劃花文） 倣龍泉窯青磁（<u>莆田窯</u>、<u>南安窯</u>、<u>福清窯</u>など）</p> <p>白磁（数量が激減）：<u>閩江流域産</u> 景德鎮窯系青白磁（影青）： 景德鎮窯、<u>大口窯</u>（14世紀まで出土）</p> <p>建盞・天目碗： <u>建窯</u>および<u>福州近郊の窯</u>、<u>武夷山遇林亭窯</u>、<u>吉州窯</u></p> <p>陶器（雑器・経筒など） <u>晋江磁甗窯</u></p>	<p>白磁が激減し、青磁が主体。</p> <p>東南アジアと異なり徳化窯の青白磁や白磁は少量。</p>
13世紀前半 南宋後半から 元初	<p>青磁：龍泉窯（外面蓮弁文）、倣龍泉窯（櫛描文消滅。外面条線文）</p> <p>白磁：口禿（出現）</p>	
13世紀後半 元（鎌倉時代）	<p>青磁：龍泉窯（砧青磁、外面蓮弁文、内底貼付文）</p> <p>白磁（碗・皿）：寧徳窯系（口禿）、徳化窯系、莆田窯系（型作）、連江窯（今帰仁タイプ）、閩清窯（ピロースクタイプ）</p> <p>白磁（四耳壺）：<u>福建産</u> 青白磁（梅瓶）：<u>景德鎮窯系</u>、<u>福建系</u></p>	<p>日元貿易：住蕃貿易の消滅と博多商人の出現</p>
14世紀前半 元（鎌倉時代後期、南北朝時代）	<p>龍泉窯系青磁：（天龍寺手）</p> <p>白磁：景德鎮窯（「枢府」）、閩清窯、連江窯、四耳壺（閩江流域産）</p> <p>青白磁：景德鎮窯系（口禿）</p> <p>白地鉄絵：磁州窯系、吉州窯系</p> <p>陶器：宜興窯（四耳壺）、<u>磁甗窯</u>、<u>茶洋窯</u>、<u>洪塘窯</u>（褐釉壺）、<u>贛州窯「插座」</u>、<u>建窯建盞</u>（アンティーク）</p>	<p>寺社造営遼唐船</p>
14世紀後半 元末・明時代	<p>青磁：龍泉窯系（外面蓮弁文、雷文）</p> <p>白磁：邵武窯（型作）</p> <p>青花：景德鎮窯</p>	<p>明の成立と琉球の「進貢貿易」：明による海禁政策のため、中国陶磁の輸入量激減</p>

註：太字は代表的な輸入陶磁器、下線は福建産陶磁器を示す。

陶磁器から見た海域アジア（徳留）

i) 龍泉窯青磁、景德鎮窯青白磁・白磁、福建産の各製品がセツトで発見されているか、ii) 龍泉窯青磁が中心か、iii) 龍泉窯青磁と福建産製品、iv) 福建産（複数の窯の）製品が中心で、一四世紀後半に発見例は現状ではかなり少ないがv-i) 景德鎮窯卵白釉磁（枢府手）、v-ii) 景德鎮窯青花、龍泉窯青磁、福建産製品といった組成となっている。もちろん沈船から引揚げられた陶磁片が各船の当時の積み荷の全体の組成を必ずしも反映しているとは言えないが、中国東南沿岸部における様相とも大よそ共通しているものと考えられる。龍泉窯青磁が流行していたことがよく分かるだけでなく、龍泉窯や景德鎮窯の製品と比べて粗製品である福建陶磁もかなり需要があったことを物語っており、いかに中国陶磁そのものが需要があり、しかもそれが社会的階層が高い人々以外にも広がっていたことが想定される状況と言える。徳化窯をはじめ、福建南方産の製品が日本に流通することはほとんどないが、しかし、良質の龍泉窯青磁や景德鎮窯製品と粗製の福建陶磁が需要されているという枠組みは日本と東南アジアでは共通する部分と言える。

その一方で、一三世紀から一四世紀における東南アジア地域は、国家、部族社会など社会の統合のあり方が異なっており、また中国陶磁の使用や需要の様相にも違いもある

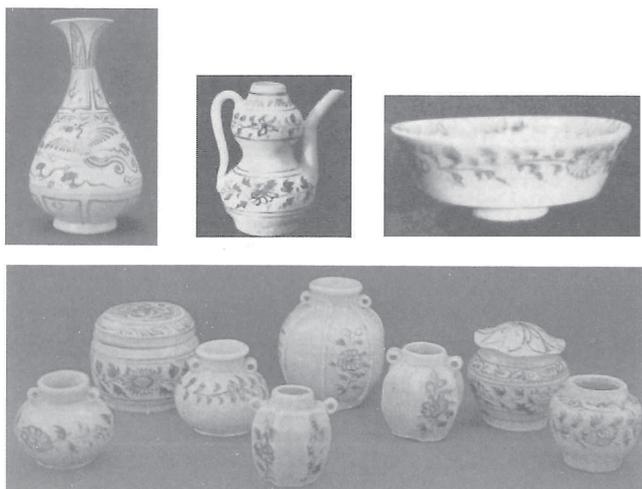


図15 サンタ・アナ出土の元青花（田中 2015 より転載）

ようである。

当該期のフィリピンは部族社会であり、青柳洋治氏（一九九二）によると一二世紀から一三世紀はアビオク洞穴遺跡、一三世紀後半から一四世紀は、サンタ・アナ（Santa Ana）遺跡が時代を考える指標になっている。アビオク洞穴遺跡では同安窯系青磁、泉州（晋江）窯黄釉褐彩陶といった福建陶磁が中心である。サンタ・アナ遺跡では、龍泉窯青磁、徳化窯白磁、景德鎮窯白磁、青花、泉州（晋江）窯緑釉・褐彩などが出土している。サンタ・アナ遺跡はルソン島中部のバイ湖とマニラ湾をつなぐ、パシグ川南岸に立地しており、元時代にはフィリピンの海外貿易の窓口の一つであり、また同時期の墓地遺跡でもある。この墓地遺跡を分析した田中和彦氏（二〇一五）によると、墓の副葬品に元青花を有する成人墓と小児墓があり、元青花を副葬する墓は分布が偏り、いくつかの墓群にまとまる傾向があるようである。田中氏は、黄蠟、降香、竹布、木綿花といったサンタ・アナ地区で獲得できるマニラの特産物の対価に元青花を入手した可能性を指摘している。当該墓地で見られる元時代の景德鎮窯青花は玉壺春瓶形以外は、いずれも小形の罐、双耳罐、折腹碗、水注などであり（図15）、フィリピンをはじめ東南アジアを中心に流通するタイプである（江建新二〇一八）。小形の双耳罐（壺）は中国国内ではほ

んど流通していない。交易を通して中国製の陶磁器を獲得し、それまでに流通していたタイプと異なる新しい中国陶磁を所持することが重要な意味をもっていたものと思われる事例である。

インドネシアのヒンドゥー教を国家編成原理とするマジャパヒト王国（二二九三—一四七八）の首都トローラン遺跡では、大量の中国陶磁が出土していることが知られている（亀井二〇一〇、坂井・大橋二〇一四）。亀井明徳氏（二〇一〇）によるとマジャパヒト時代の中国陶磁の粗製は福建産輪状釉剥碗（三三%）、徳化窯白磁（四%）、龍泉窯青磁（二九%）、景德鎮窯青白磁（二%）、青花（二%）、また貯蔵用壺（三〇%）となっており、盤、罐（大壺）が多いことが指摘されている。トローラン遺跡ではその割合は少ないが元青花が出土しており、いわゆる至正様式の大形の瓶・罐などであり、先述したフィリピンの様相とは異なっている。また同じくインドネシアのジャワ島トウバン海域引揚げ品は、港湾遺跡あるいは沈船遺跡の可能性が指摘されているが（Abu・Wayono 一九八三、金沢二〇〇九 a、b）、龍泉窯青磁碗・盤のほかに、景德鎮窯の「枢府手」の白磁碗・皿類と文様の簡素なタイプの青花碗、福建莆田窯（あるいは連江窯）産の粗製の碗、皿類、徳化窯の白磁碗（型作り）が採集されており、韓国新安沈船よりも時期

的にやや新しい一四世紀中葉の元時代後半期（あるいは明代初期も入る可能性もある）頃の資料と考えることができる。トローランとトゥバンの資料が全く同時期であるとは言いい切れないが、両者の組成の違いは、マジヤパイト王国の首都と港湾（あるいは沈船）という遺跡の性格の違いが反映されている可能性もある。またトゥバンの資料に関しては西沙諸島で検出された石嶼二号沈船の陶磁器の組成に比較的近いものと思われる。

スコータイ朝首都の古城スコータイでは、現状で知られるインドネシアやフィリピンにおける中国陶磁の使用の様相が異なる事例報告がされている。向井互氏（二〇一五）によると、ラームカムヘーン国立博物館敷地内の寺院遺跡仏塔埋納事例において、仏塔内から出土する陶磁器（一四世紀中・後葉）には、i) 埋納品をおさめる壺類、蓋（小皿）ii) 容器とii) 埋納品：中国産二〇点、タイ産七点がある。埋納品の内訳は元青花の大壺の蓋一点、碗一点、龍泉窯青磁の広口壺一点、福建莆田窯青磁小皿四点、小壺一点、合子一点、華南白磁の小皿二点、華南褐釉磁の壺八点、タイ産陶磁としてスコータイ五点、不明一点、ボスワック一点となっている。なお仏塔周辺からも多数の元青花、龍泉窯青磁、釉裏紅製品が出土しているとのことであるが、スコータイ中心域の仏塔に埋納される製品は元青花（大壺、梅瓶）

が主体で大形器物が仏教儀礼の中で利用される一方で、仏教儀礼との関係性が薄い遺跡（例えば、ピサヌローク市チャン王宮跡）では、元青花は出土するが小碗や盤が中心で大壺や梅瓶は出土しないことから、種類、器種、サイズにより使用・受容のあり方が異なっていることが指摘されている。

最後に、東南アジア地域ではないがインドとアフリカの事例、またインドネシアであるが伝世する青磁の利用のあり方とその意義について取り上げておきたい。

インドのトゥグルク朝の第三代スルタンのフィールーズ・シャー・トゥグルク（一三〇九―一三八八）が、一三五四年にデリーに宮殿を建築している。彼が崩御した後、ティムール軍により宮殿が陥落しているが、その遺跡からは七十二件の磁器が出土し、そのうち四四件が青花盤、二三件が青花碗、四件が青磁盤、一件が青磁碗で、このうち六七件は一四世紀中葉の元代の磁器であった。いずれも大形の製品であり、それらは宮殿で使用されたものであると考えられている（金沢など二〇一〇、五四―六頁）。

アフリカ東部のケニア沿岸部ケディ古城の事例は東南アジア地域とは異なる様相を示す事例が知られる（劉・秦等二〇一二）。調査を行った秦大樹氏（二〇一四）は、一三世紀から一五世紀初頭の南宋末期から明代初期において、とくに元時代から明代初期の陶磁器の流通量の増加

が顕著であり、東南アジア地域で見られるような粗製の福建産陶磁器はかなり少ない一方で、龍泉窯青磁が中心で、粗製品だけでなく明時代初期の龍泉官器（龍泉楓洞岩窯址産）を含むかなり質の高い製品が見られることを指摘している。また、当該地域において元時代に中国陶磁器の流通量および精製品が多い背景に關して、イル・ハン国と元朝との間に

国家主導の交易により質の高い中国陶磁が流通した可能性を指摘している。明朝は海禁政策をとっており、一四世紀後半から一五世紀後半頃（二三五二―一四八七年）まで、民間の自由は貿易が制限されたことを背景に、中国陶磁器の流通量が減少していること、また景德鎮青花の出土量が少ないことから交易が激減していたと考えられることもあったが、明時代初期の龍泉官器の中国国外での出土事例・伝世事例は少なくないことから、元時代後半から明時代前半においても鄭和の遠征を背景にした官による対外活動についても、さ

史苑（第七九卷第二号）

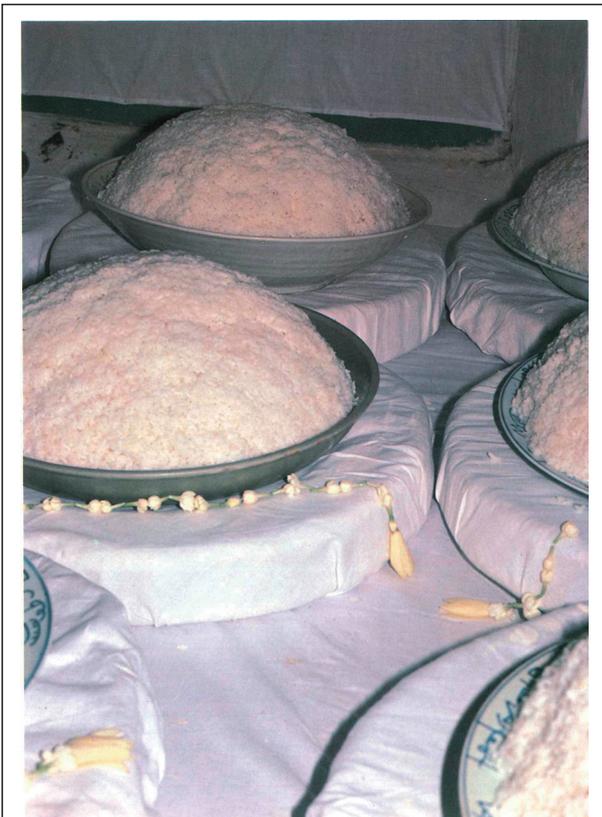


図 16 インドネシア・カススナン王宮の豊穰祭で使用された青磁盤
(Sumarah Adhyatman.1981 より転載)

らに注目していく必要がある（秦大樹二〇一四、九八頁）。そのような中でインドネシアの王宮で行われた儀礼行事における青磁の使用の事例は興味深い示唆を示してくれるものである（Sumarah 一九八一）。一九七一年にカススナン王宮で行われた豊穰祭の中で、複数枚の口径四〇cm以上の

大皿が使用されている。大皿には米を盛り、儀礼の最中は王のみがその皿に触れることができる。それらの大皿は漳州窯のほかに、一点明代初期の龍泉窯青磁の官器と思われるものも認められ、マタラム王国（二五八七—一七五五）の第三代スルタンのスルタン・アグン（在位：一六一三—一六四五）が所有していたものとされている（Sumarati 一九八一、二五〇頁）。このうちこの龍泉官器の大皿はおそらくは永楽期のものであると思われることから（図16）、実際にはマラタム王国が成立以前にインドネシアあるいはその周辺の国に明朝から与えられ、その後スルタン・アグンが所有したものと考えられる。この龍泉官器はきわめて大形で優品であり、また明王朝と直接的な交流がなければ、容易に入手することが困難であった製品である。そのためそれを所持することが当該地を治めるための威信材的なものとなっていた可能性がある。またいつの段階から豊穰祭の器として用いられるようになったのかは不明であるが、宮廷に以前から所蔵されていた中国陶磁を重要な儀礼行為の中で使用し続けていることは、一四世紀頃（あるいは一五世紀前半も含めて）の海域アジアを介した交流の中で行われたモノの移動が、それぞれの地域の中で受容され、そして日常生活のみならず社会や集団の紐帯を維持するための道具として、近現代社会においても影響を与えている

事例として捉えることもできる。

六 まとめ

以上、一三世紀から一四世紀を中心に、中国東南沿岸部の沈船から引揚げられた陶磁器の組み合わせと、東南アジア地域で出土・流通・消費される状況を整理してきた。結論からすれば一五世紀中頃におけるインパクトとは異なるが、一三世紀から一四世紀の間において中国陶磁器の中国国外への流通の様相から、とくに一四世紀、元時代中々後半頃に大きな画期があったと言える。それは龍泉窯青磁・福建陶磁の流通の増加、そして元青花の出現・流通にともない、陶磁器組成・使用における多層的な受容のあり方がアジア各地で見られるようになったからである。もちろん地域ごとで中国陶磁の受容のあり方（種類や嗜好される文様など）は異なるが、より品質が高い青磁や意匠や色調が新しいものである青花は貴重なものであり、ステータス・シンボルや社会集団を統合する際の象徴的な器物としての機能も顕著になっている。

また東南アジア地域における陶磁器の需要の高まりにあわせるように中国国外への陶磁器の流通量やその嗜好にあわせた製品作りが進み、その結果中国国内における陶磁器

生産にも技術の革新をもたらしたという意味において、とくに一四世紀の海域アジアにおける人とモノを介した活発な交流が、その後の大航海時代を迎えるにあたっての大きな基盤を形成することになったと評価できる。

ところで、東南アジアで確認されている沈船資料の中国陶磁の組成を見ると、先に見てきた東南アジアの各地域における中国陶磁の受容のあり方と対応しているような様相は不明である。今後、東南アジア地域内における中国陶磁の具体的な流通経路などもあわせて考えていく必要がある、課題としたい。

謝辞

本論は公開講演会「モンゴル帝国環インド洋・ユーラシア交流の再検討——一三——一四世紀は海域アジア史の水嶺か?」の中で、口頭発表をもとにまとめたものです。シンポジウムでの発表の機会を与えていただいた四日市康博先生をはじめ、発表に対するコメントをいただきました。桃木至朗先生、また本論をまとめるにあたり以下の方々から多くのご教示や資料調査に際してご協力をいただきました。記して感謝申し上げます(敬称略、アルファベット順)。
金沢陽、李炳炎、栗建安、森達也、森本朝子、全洪、田中克子、沈岳明、矢島律子、羊澤林

参考文献

中国語(アルファベット表記順)

陳万里一九五九「我对“青白磁器”的看法」『文物』

一九五九年第六期。

福建省博物館一九九三「福建惠安銀厝尾古窯址発掘簡報」

『考古』一九九三年第一期。

福建省泉州海外交通史博物館編一九八七『泉州湾宋代海船

発掘与研究』海洋出版社。

金沢陽、賀利、William R. Sagant 二〇一〇「第十章 中

国外貿易陶器」『中国陶器芸術』外文出版社・耶魯大

学出版社。

広東省文物考古研究所編二〇一一『二〇一一年「南海Ⅰ号」

的考古試掘』科学出版社。

国家文物局水下文化遺産保護中心・中国国家博物館・福建

博物院・福州市文物考古工作队二〇一七『福建沿海水

下考古調査報告(一九八九—二〇一〇)』文物出版社。

国家文物局水下文化遺産保護中心・広東省文物考古研究所・

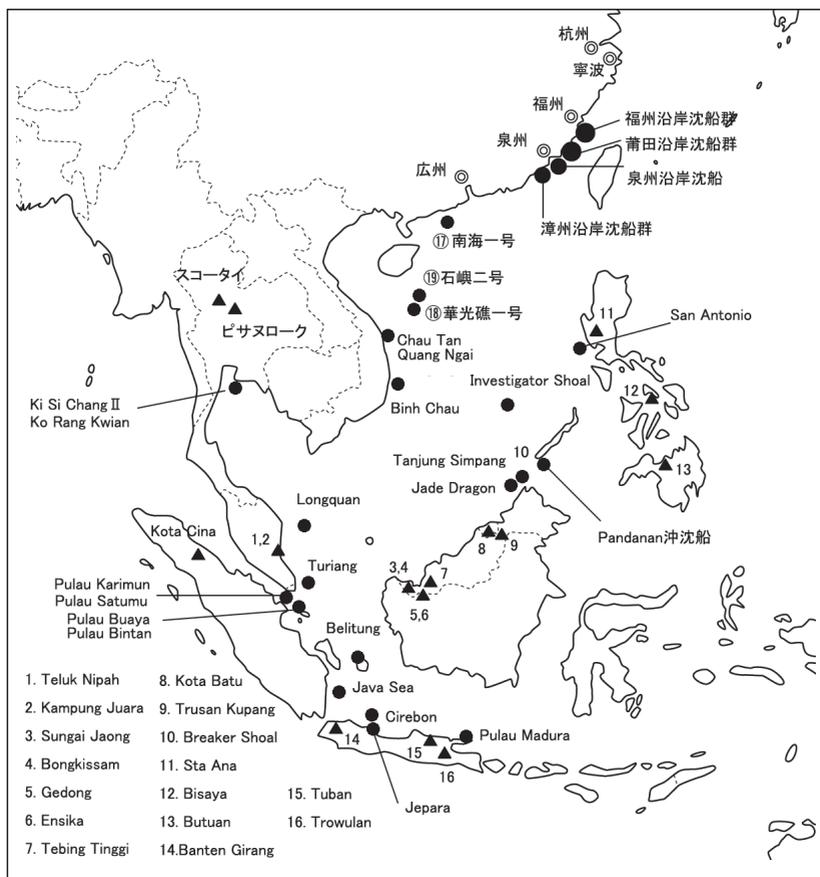
中国文化遺産研究院・広東省博物館・広東海上絲綢之

路博物館二〇一七『南海Ⅰ号沈船考古報告之二(上)

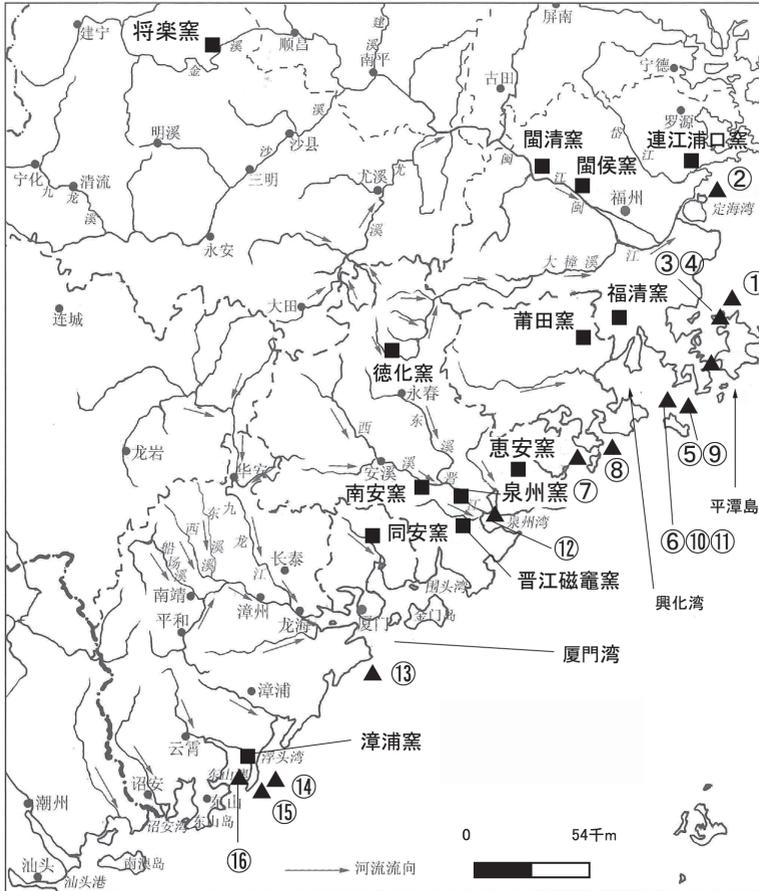
(下)』文物出版社。

郝思德二〇一一「從華光礁Ⅰ号沈船遺址文物看海上陶器貿

易」『大海的方向 華光礁Ⅰ号沈船特展』鳳凰出版社。



附図1 宋元時代の中国東南沿岸地域および東南アジア地域における沈船分布図（筆者作成）
 （凡例：●沈船の位置、▲は福建陶磁が出土している遺跡）



附図2 福建沿岸部地域の沈船および窯址分布図（孟召原 2017、
 図5-9に窯址および沈船情報を加筆）

陶磁器から見た海域アジア（徳留）

湖南省博物館編二〇一一『大海の方向 華光礁1号沈船特展』鳳凰出版社。

栗建安二〇一七『外鎖菲律賓の福建宋元陶瓷』Song-Yuan period, 11th-14th century. The Oriental Ceramic Society of the Philippines.

劉森・胡舒揚二〇一六『沈船・瓷器与海上絲綢之路』社会科学文献出版社。

劉岩・秦大樹・齊里亞馬・赫曼二〇一一『肯尼亞濱海省格迪古城遺址出土中國瓷器』『文物』二〇一二年第一期。

孟原召二〇一七『閩南地区宋至清代制瓷手工業遺存研究』文物出版社。

森達也二〇一〇『從出土陶瓷來見宋元時期福建和日本的貿易路線』『閩商文化研究文庫第二卷 考古學的視野中的閩商』中華書局。

彭濤二〇〇三『元代景德鎮青花瓷器的外鎖及相關問題』『南方文物』二〇〇三年第二期。

彭适凡主編一九九八『宋元紀年青白瓷』庄万里文化基金會。

秦大樹二〇〇七『拾遺南海、補闕中土——談井里汶沈船出土的瓷器』『故宮博物院院刊』二〇〇七年第六期。

沈岳明二〇〇七『越窯的發展及井里汶沈船的越窯瓷器』『故宮博物院院刊』二〇〇七年第六期。

王淑津・劉益昌二〇一〇『大盆坑遺址出土的十二至十四世

紀中國陶瓷』『福建文博』二〇一〇年第一期。

辛光燦二〇一四『附錄四 新加坡及附近海域發現的一四世紀龍泉窯青瓷』『福建平潭大練島元代沈船遺址』科學出版社。

羊澤林二〇一一『福建水下考古發現与相關問題初探』『水下考古研究』第一卷、科學出版社。

趙嘉斌・吳春明二〇一一『福建連江定海灣 沈船考古』科學出版社。

浙江省文物考古研究所編二〇〇五『龍泉東區窯址發掘報告』文物出版社。

中國國家博物館水下考古研究中心・福建博物院文物考古研究所・福州市文物考古工作隊二〇一四『福建平潭大練島元代沈船遺址』科學出版社。

中國國家博物館水下考古研究中心・海南省文物保護管理弁口室編著二〇〇六『西沙水下考古（一九九八—一九九九）』科學出版社。

中國國家博物館水下考古研究中心・海南省文物局二〇一一『西沙群島石嶼二號沈船遺址調查簡報』『中國國家博物館館刊』二〇一一年第一期。

（日本語）（50音順）

Abu Ridho, Wayono M.（亀井明徳訳）一九八三『The

Ceramic Found in Tuban, East Java』『貿易陶磁研究』三。

青柳洋治一九九二「交易の時代」（九〜一六世紀）のフィ

リピン―貿易陶磁に基づく編年的枠組―』『上智アジア学』第一〇号。

亀井明德二〇一〇『インドネシア・トロローラン遺跡発見陶

瓷の研究―シンガポール大学東南アジア研究室保管資料―』専修大学アジア考古学チーム。

金沢陽二〇〇九a「陶片資料紹介(8) インドネシア・トゥ

バン海域引揚げの元代「樞府手」白磁と青花片』『出光美術館研究紀要』第七号。

金沢陽二〇〇九b「陶片資料紹介(9) インドネシア・トゥ

バン海域引揚げの青磁皿・碗』『出光美術館研究紀要』第一四号。

江建新(訳・徳留大輔)二〇一八「近年の考古出土資料から見た元青花 磁器の生産とそれに関する諸問題」『韓

国陶磁研究報告 一一号』大阪市立東洋陶磁美術館。

坂井隆・大橋康二二〇一四『インドネシア、トロウラン遺

跡出土の陶磁器』モノグラフィシリーズ、上智大学。

佐々木達夫二〇一五「総論 元青花の誕生と継承」『中国陶瓷元青花の研究』高志書院。

佐々木花江・佐々木達夫二〇一五「西アジアに流通した元

青花』『中国陶瓷元青花の研究』高志書院。

謝明良二〇一五「元青花磁器覚書」『中国陶磁 元青花の研究』高志書院。

田中和彦二〇一五「フィリピン出土の元青花」『中国陶磁 元青花の研究』高志書院。

田中克子二〇〇八「中国陶磁器」『中世都市 博多を掘る』海鳥社。

田中克子二〇一九「博多」にもたらされた中国陶磁器―国内消費地との比較材料として―『貿易陶磁器と東アジアの物流―平泉・博多・中国―』高志書院。

中国硅酸盐学会(日本語監修 佐藤雅彦・長谷部学爾・弓場紀知)一九九一『中国陶磁史』平凡社(原著は『中国陶磁史』一九八二年、文物出版社)。

鄭建明(徳留大輔訳)二〇一九「生産区域の広がりから見る龍泉窯の対外輸出」『貿易陶磁器と東アジアの物流―平泉・博多・中国―』高志書院。

徳留大輔二〇一六「宋元時代の福建陶磁と東アジア」『韓国陶磁研究報告 第九号』大阪市立東洋陶磁美術館

徳留大輔二〇一九「日本に出土・伝世する青白瓷梅瓶に関する一考察」『出光美術館研究紀要』第二四号。

徳留大輔・平原英俊・桑静・田上勇一郎・栗建安・羊澤林・沈岳明・會澤純雄二〇一七「ポータル複合X線分析

陶磁器から見た海域アジア(徳留)

による中世前半期の中国産陶磁器の産地推定に関する研究——福建・浙江産陶磁器の研究を事例に』『東洋陶磁学会』四八号、東洋陶磁学会。

向井互二〇一五「タイ出土の元青花」『中国陶磁 元青花の研究』高志書院。

森達也二〇一三a「中国唐宋元時代の陶磁生産と海外輸出」『陶磁器流通の考古学 日本出土の海外陶磁』高志書院。

森達也二〇一三b「日本出土の中国唐宋元の陶磁」『陶磁器流通の考古学 日本出土の海外陶磁』高志書院。

森達也二〇一九「大陸と列島をつなぐ陶磁器流通ルートの様相」『貿易陶磁器と東アジアの物流』高志書院。

森本朝子二〇〇九「東南アジアにおける一四世紀前後の福建陶磁—インドネシア・マレーシア・フィリピンへの遺跡の出土遺物—」『一三—一四世紀の琉球と福建』平成一七—二〇年度科学研究費補助金基盤研究(A)(2)研究成果報告書、熊本大学文学部。

栗建安(放生育王訳)二〇〇八「中国福建地区古代貿易陶磁の生産と輸出」『東アジアの海とシルクロードの拠点 福建—沈没船、貿易都市、陶磁器、茶文化』海のシルクロードの出発点福建展開催実行委員会。

(英文)(アルファベット表記順)

Abu, Ridho & E. Edwards Mckinnon. 1998 *The Pulau Buaya Wreck Finds from Song Period*. The Ceramic Society of Indonesia Monograph Series No.18.

John, Carswell. 2000 *Blue & White: Chinese porcelain around the world*. British Museum Press:London.

Kwa, Chong Guan. 2012 *Locating Singapore on the Maritime Silk Road: Evidence from Marine Archaeology, Ninth to Early Nineteenth Century. Marine Archaeology in Southeast Asia. INNOVATION and ADAPTATION*. Asian Civilisations Museum:Singapore.

Michael, Flecker. 2012 *Rake and Pillage: The Fate of Shipwrecks in Southeast Asia. Marine Archaeology in Southeast Asia. INNOVATION and ADAPTATION*. Asian Civilisations Museum :Singapore.

Michael, Flecker. 2015 *The China-Borneo Ceramics Trade Around the 13th Century: The Story of Two Wrecks. Ancient Silk Trade Routes*. World Scientific Publishing Co. Pe. Ltd.

Sumarah Adhyatman. 1981 *Keramit Kuna yang*

ditemukan di Indonesia. Antique Ceramic found in Indonesia, Various Uses and Origins. The Ceramic Society of Indonesia.

Tan, Rita C. 2017 Fujian Ware Found in the Philippines Song-Yuan Period, 11th-14th Century. South China Sea before the age of commerce. *Fujian ware found in the Philippines : Song-Yuan period, 11th-14th century.* The Oriental Ceramic Society of the Philippines.

Purissima Benitez-Johannot. 2017 South China Sea before the age of commerce. *Fujian ware found in the Philippines: Song-Yuan period, 11th-14th century.* The Oriental Ceramic Society of the Philippines.

註

(1) この問題に関しては至正様式の成立期をいつの段階に考へることができるとかという議論ということになるが、謝明良氏が詳細をまとめられているので参考いただきたい(謝二〇一五・六〇-六一頁)。

(2) 出光美術館で所蔵するフィリピン・ルソン島のプエルトで採集された中国陶磁には龍泉窯青磁・晋江磁窰窯の褐釉陶・泉州東門窯の青磁・莆田窯(あるいは連江窯)産の粗製の白磁などがある。

(出光美術館主任学芸員)

